

## 20世紀とバレエ

### —混合の成果—

佐藤俊子

#### 「混合の成果」へ到る道

筆者は前回の発表で、20世紀バレエがロシアから南下し、ロシア大革命（1917）や第1次世界大戦（1914-18）などの理由で祖国への帰還の機を逸したディアギレフの率いるバレエ・リュス（1909-29）の種蒔きにはじまり、さらにはディアギレフの突然の死によって世界中にばらまかれたその種子の生育につれて、多種多様なモダン・バレエが形成された過程を「混合の模索」として触れた。

20世紀はバレエにとって特別な世紀であると思う。20世紀においてのみ、バレエは世界中に散在し、交流し、停止を知らぬかの如くに国境を越え、人種差別を廃して動き続けている。しかも近年、長足に進歩した交通網、通信網、マスメディア技術がこれを助長している。

長い舞踊の歴史上、かつてこのような時代はなかった。あらゆる芸術は国別にその特徴を整備し、ジャンル別に発展を遂げ、その時折の宗教や政治に大きく左右されながら歴史を語ってきた。イタリア・ルネッサンスの人間復興の渦の中に誕生したバレエはイタリア戦役を機にフランスへ移り、17世紀フランスの太陽王ルイ14世（在位1643-1715）の堅固な絶対王政に密着してその基礎を築いた。ルイ14世自らが太陽の衣裳を身につけて主演するためにクレモンに命じて作らせた『夜』（1653）はきわめて象徴的にフランス・バレエの意義を物語っている。もちろん、コール・ド・バレエの画く線は絶対王の圧倒的権力を示す幾何学的直線でなければならなかった。大ざっぱに見るならば、このとき以来、バレエは原則としては宮廷に仕え、宮廷によって育てられたのである。当然のことながら、1789年のフランス革命はフランスにおけるバレエの発展に完全な終止符を打った。以後のバレエの発展は本能的に、時代遅れの宮廷を1917年の大革命まで温存したロシアに向かい、誇り高い完成を成し遂げた。その貴重な完成を背景にしてこそ、20世紀バレエのスタートがあり、反逆がありえたのだと思う。

#### 「混合の成果」の背景—国際文化交流時代

血は交われば強くなる。比較文化は新たな視点を開発し、相互理解を深める。20世紀の国際的交際網の整備、通信網の整備、マス・メディア技術の長足の進歩は世界の都市間の距離を短縮した。今や10代の若者から80代90代のシニアたちに到るまで、きわめて気軽に世界旅行を楽しむ時代であ

る。国際的相互交流は国際的相互理解に自ずと連なり、20世紀は国際文化交流の時代となる。本稿のテーマである20世紀バレエの「混合の成果」に到る道のりは、国際文化交流のたどる道のりでもある。

かつて大航海時代には国際航路の発見や開拓があったし、その後の帝国主義的植民地時代にも国際文化交流がなかったわけではない。さらに遡れば、我々の想像を絶する大昔においても東と西の交流はたえずあり、しかも我々の日頃の常識に反して東洋が西洋を触発するケースも少なくなかったのである。国際文化交流は何も20世紀に限られた特異な現象ではないという見方もできる。

しかし、20世紀の国際文化交流はやはり少々質が違ふような気がする。20世紀は2度にもわたり史上初の世界大戦で世界中の国々を相互認識に導いた。それまで旧大陸を知らなかったアメリカの若者がパリに住みついたり、それまでその名も存在も知られなかった極東の島国日本が徐々に世界中から覚えられるようになった。一方、戦争が名もないただの個人に及ぼす数々の不幸は平和への執拗な願望を強化した。祖国へ戻れない不幸、肉親の生死すらも知りえない不幸。それらを筆者はスターリン時代のロシアから来日したバレエの恩師の45年の東京での暮らしに見た。平和でなければならぬ。国境は閉ざされてはならない。筆者は師の深い悲しみにそのことを体験的に認識した。不幸も悲しみも2度とくりかえしてはならない、と世界中がこぞって学んだに違いない。かつての植民地支配のような実益本位の政策ではない、新しい国際文化交流が、すべての人々による「協力の時代」の原点あるいは基本として、興隆しつづると見るのである。

事実、大戦中の文化的不自由、制約、犠牲の反動のように、とりわけ第2次世界大戦の終結した1945年以降、主要国家においては政府の熱心な関与によって文化交流が推進されるようになった。世界中が国際的理解と協力の最良の手だてとして、日々に強まる精神的な要求に見あうものとして文化交流を認識しはじめたのである。

#### 「混合の成果」とは

国境をはずし、人種の壁を取り払い、ジャンルの枠をも消し去ろうという、まったく異例の20世紀において、言語を介せず、直接人体を表現媒体とする舞踊ほど、すみやかに行動を起こしやすいものはない。今やバレエは早朝のエグゼルスさえ終えてしまえば、あとはいかなる様式を受け入れようと、いかように変貌しようと自由である。その事実を筆者は「混合の成果」と見たいのである。